

平成29年1月5日に職員と話した内容です。

年末に新潟県糸魚川市で大火がありました。4万㎡が焼けるという大きな被害が出た一方で、幸いにも死者はゼロでした。死者が出なかった理由として、報道では、古くから「南風が強いときは火事に気をつけろ」という言い伝えがあったこと、ご近所が顔見知りであったため、互いに声を掛け合い、早めに避難が行われたことなどが挙げられています。

もし、本市で同じような大火があった場合、住民同士、声を掛け合って避難することはできるでしょうか。

本市の人口は、昭和44（1969）年に1万人、昭和57（1982）年に2万人、平成元（1989）年に3万人を超え、現在、約5万7千人となりました。この50年弱の間に、一気に4万人も人口が増えました。その多くが、市外から長久手に引っ越してきた方々です。

歴史ある「古戦場のまち」ではありますが、今の長久手は、人が集まっただけであり、暮らしの場としての「まち」の歴史は浅いと私は感じています。

日本の自治体の約8割で、人口減少が始まっていますが、そうした自治体の多くは、暮らしの場としての「まち」の歴史があり、住民同士の支え合いがあります。

一方、本市では、ご近所同士のあいさつや声掛けも、まだまだ十分とは言えません。今から始めても、糸魚川市のような支え合いができるようになるには、10年、20年とかかります。しかし、今から始めれば、子ども達が大人になったとき、互いが支え合える歴史ある「まち」になれるのです。

先日、中学3年生と意見交換をする機会がありました。みんな真剣に長久手のことを考えていました。子ども達は、自分でまちをよくする経験、まちをつくる経験をしたことがあれば、東京などに進学や就職しても、いずれ必ず長久手に戻って来ます。そうした経験が「ふるさと」を作るのです。でも、今の長久手には、それがありません。



私たち大人達は、「自分達でまちをつくるなんて、わずらわしいことはやらない」と済ますのではなく、今こそ、次の世代のために、苦労してでもまちをつくっていくことが必要なのです。

～市長の話を聞いて～

市長と中学3年生が話をした場に同席をしました。公民の授業の一環だったそうですが、それぞれが真剣に長久手のことを考えていました。数年前には、この授業をきっかけに、通学途中に落ちているごみが気になり始め、同級生にごみ拾いを呼びかけた中学生もいます。中学生たちの「長久手が好き」「もっと良いまちにしたい」というまっすぐな思いをうれしく思いました。